

# 森田草平 『吉良家の人々 四十八人目』 挿画について

## ——石井鶴三宛森田草平書簡・関連領収書から

高野 奈保

### 0 はじめに

信州大学所蔵石井鶴三関連資料から、森田草平による石井鶴三宛書簡（仮番号「書6―4―1」）、ならびに石井鶴三による改造社宛書簡および挿画料領収書（仮番号「書13―3」）が発見された。これらは、いずれも新出資料である。本稿で、その解題を付す。

解題に先立ち、森田草平の略歴を述べる。森田草平（明治十四年〔昭和二十四年〕は岐阜県出身の小説家・翻訳家である。漱石の門下生。自身が講師を務めた閩秀文学講座の聴講生平塚らいてうと、明治四十一年に起こした栃木県塩原での心中事件を元に書いた『煤煙』（『東京朝日新聞』明42・1・1〜5・16）で一躍文壇の寵児となる。その後間もなく翻訳業に軸足を移し、イプセンやドストエフスキー、ダヌンツィオなどを手がけた。一方で創作も続けており、代表作に『輪廻』（『女性』大12・9〜14・12）、『細川ガラシヤ夫人』（『日本評論』昭24・1〜10、昭25・1〜3）などがある。

### 1 森田草平の石井鶴三宛書簡

まず、書簡本文の翻字を掲げる。

拝啓

「吉良家の人々」が漸く去る五日に出版になりました、お陰様にて立派な書物

になり有難う存じ

ます、さて八日に改造

社へ参り、書物を

お届けすると共に改

造社としての薄謝

をも早くお届けす

るやうに副社長

に会つて申して参

りました、その後

出向きましたでせう

か如何でせうか

春陽「会 右傍挿入」の御招待券

わざわざ御恵贈に

あつかり誠に有難う

△いました 最「後 ミセケチ」終

日に一寸覗かせて頂  
 きました、私には  
 絵は分りませんで  
 何とも申上げず、  
 けれども中川君の数  
 枚つゞきの写生帳  
 のやうなものが素  
 人には一寸面白い  
 やうに存ぜられました、  
 かねてお願い申せ  
 し吉良家並びに  
 四十八人目の版下  
 画 他にお差支さへ  
 なければ、小生が  
 譲つて頂きたいと存  
 じてゐます、何うい  
 ふ風にいたしたら「小生  
 の ミセケチ」よろしきものと  
 その後いろく考へま  
 したが、とにかく小生  
 の吉良家の「不明一字 ミセケチ」印税  
 の半分（と申しても僅  
 に百五十円也）を来月  
 に削つて改造から受  
 取次第持参して  
 画を頂戴に参上し

ますから、何卒そ  
 れにて御ふしやうな  
 し被下候、画も

小生がそれを持つて頂

戴に上るまでお預

り置きを願ひた

う存じます、

それにしても何ういふ

風にして保存したも

のか、帖にするか、屏

風にするかそれとも

二枚つゝ位軸にした

ものか、その辺お考

へ置きを合せてお願

ひ申上げます

用事のみ 草々

五月十五日

石井鶴三様

草平

封筒表の宛先は、「東京市外板橋町／中丸／石井鶴三様」、消印の  
 地名は鎌倉、日付は昭和五年五月十六日の、午後〇時から三時で  
 ある。封筒裏の差出人は森田草平。「鎌倉町由比ヶ浜／一ノ鳥居傍」  
 と彫られた住所印が押され、五月十五日と日付が記入されている。  
 封筒裏の左下には、「春陽堂製」の型押しがある。

書簡二行目にある「吉良家の人々」とは、昭和五年四月三十日に

改造社から発行された、『吉良家の人々 四十八人目』のことである。装幀（函、表紙、扉）は中川一政が担当し、鶴三は挿絵を五葉、描いている。うち口絵を含めた四葉が、「吉良家の人々」の挿画である。「吉良家の人々」は、「東京朝日新聞」の夕刊に、昭和四年四月十六日から六月二十五日に連載され（全五十四回）、挿絵を鶴三が担当した小説である。〈忠臣蔵〉として知られる播州赤穂藩浪人の吉良邸討ち入り事件を、吉良家側の人間から描いたものである。

単行本の挿画は、連載時の挿画の構図をほぼ採用し、彩色を施している。草平の昭和四年六月二十五日付の鶴三宛書簡『石井鶴三全集』第四卷、形象社、昭61・10・11）によれば、「挿画の選定 枚数等」の選定は鶴三に任せたいとある。実際どの程度まで鶴三に任せられたのかは不明だが、草平が鶴三へ信頼を寄せていたことが見てとれる。

もつとも、単行本が順調に発行までこぎつけたわけではなかったようだ。そして、その原因は鶴三に関係があったらしい。というのは、草平の昭和五年一月一日付の鶴三宛はがき（同前）で、改造社が「吉良家の人々」の「挿画が出来ない」ことを「口実」に、昭和四年の年内に出さなかったと述べているからだ。草平は、同時に「叢書物に忙しく単行本をくり延ばした」という出版側の事情も推測してもいるのだが、鶴三に「一体画家に催促するには膝づめでなくちや駄目でしょうか」と、「小生だけ」の「特別のお計い」を懇願している。

その後も草平は鶴三に、中川一政が装幀を終えて改造社側に指図をしたから「何卒あなたも改造社の怠慢は切に御免の上 一奮発」と、再び「特にお願ひ」している（昭和五年一月五日付はがき、同前）。改造社の「怠慢」が何を指すのかは不明だが、鶴三と改造社と

の間にはトラブルがあったこと、草平がそのトラブルを承知した上で、改造社の単行本発行延引の理由を潰そうと、焦っていた様子がわかる。

右のような遣り取りを経て発行された単行本の、挿絵に対応する初出の回は、口絵が一の四（昭4・4・19）、本文五十六頁と五十七頁の間の挿絵が一の一（昭4・4・16）、九十六頁と九十七頁の間の挿絵が六の四（昭4・5・29）、百四十二頁と百四十三頁の間の挿絵が十の二（最終回）（昭4・6・25）である<sup>①</sup>。そのうち九十六頁と九十七頁の挿絵は、新聞初出時の構図に、床から身を起す新八郎の姿が加筆されている。

書簡で単行本の挿画を譲り受けたいと書かれているように、草平は鶴三の画を非常に気に入り、高く評価していたようだ。これは草平の個人的な感想にとどまるものではないようで、前掲六月二十五日付の鶴三宛書簡には「吉良家の人々」を何とか云ってくれる知人はそのついでに必ず貴下の挿画を称揚することを忘れないから、小生としてはまったくいやになる位でした。」と書き、「一例」として大佛次郎、寺田寅彦を挙げている。

さらに、新聞連載の予告には「さし絵は既に定評ある石井鶴三氏」（昭4・4・12）とあり、既に鶴三の挿画家としての地位が確立していたことがうかがえる。同作連載中には「伊東深水氏／田邊至氏／石井鶴三氏挿絵展覧会」（昭4・6・1）の広告も掲載されていた。この展覧会の主催者は東京朝日新聞社で、会期は六月一日から四日間、会場は同社の本社にある展覧会場であった。これも鶴三の人気や東京朝日新聞との関係の良好さを示す傍証となるだろう。

ところで、「吉良家の人々」は、それ単独で単行本化するには分

量が足りなかったらしい。前掲の六月二十五日付の鶴三宛書簡では、「吉良家の人々」の単行本化の希望を寄せる一方で、「実は「吉良家の人々」だけでは一冊の書物とするには枚数が足りず、あれに関係した材料を書き足そうと思つて居りますので、出版は自然遅れることと思います」と付け加えている。その「あれに関係した材料」が、単行本に収録された「四十八人目」だと思われる。

「四十八人目」は、「改造」昭和四年十月号に掲載された小説である。主人公は赤穂藩浪人の毛利小平太で、彼が吉良邸討ち入り直前に脱盟した経緯が描かれている。雑誌掲載時に挿絵はない。同号の創作は、「四十八人目」を合わせて七編。他は谷崎潤一郎「卍」、川端康成「温泉宿」、久米正雄「モン・アミ」、野上彌生子「燃ゆる薔薇」、里見淳「大地」、そして岩藤雪夫「闘ひを襲ぐもの」である。「読売新聞」に掲載された同誌の広告(昭4・9・19)を見ると、小説欄のうち「四十八人目」だけが白抜きで示されており、編集サイドの、同作への期待がうかがえよう<sup>2)</sup>。

さて、書簡本文に戻る。鶴三からの招待券を受け取った草平が赴いた春陽会の展覧会は、春陽会の第八回展を指す。会場は東京府美術館で、会期は昭和五年四月二十三日から五月十四日までであった。書簡には最終日に訪れたと書かれているので、草平は五月十四日に展覧会を見に行き、その翌日に、鶴三へ手紙を書いたことになる。

草平が「一寸面白い」と感じたという「中川君」の「写生帳のやうなもの」は、中川一政が出品した『煙霞帖』だと推測される。『煙霞帖』は一〇枚一組の作品で、各々題名が付されている。なお題名は以下のとおり。「煙霞帖一(煙霞如是好)」、「煙霞帖二(山中春望)」、「煙霞帖三(時春雨寒)」、「煙霞帖四(偶海村月)」、「煙霞帖五(我愛日本国)」、「煙霞帖六(海村春望)」、「煙霞帖七(春自遠方来)」、「煙

霞帖八(能解閑行有幾人)」、「煙霞帖九(山間日永)」、「煙霞帖十(漁樵同時)」。

なお、草平は触れていないが、鶴三は同展覧会に、油彩と素描に加えて「吉良家の人々」と「四十八人目」の挿画を出品している。

草平が鶴三の挿画料を催促した副社長の名前は、残念ながら今回の調査で特定することができなかった<sup>3)</sup>。

## 2 石井鶴三の改造社宛領収書(仮番号「書13-3」)

領収書によれば、改造社から鶴三に支払われた『吉良家の人々四十八人目』の挿絵画料は、七十五円であった。領収書のほかに、添えられた鶴三の改造社宛書簡が残されている。二葉が納められた封筒には切手が貼られていなかった。投函されぬまま、鶴三が保管していたと思われる。翻字は左のとおり。

拝復 吉良家の人々、四十八人目挿絵料として金七拾五円也  
御送り下され ありがたく頂戴致します 旅行中であり  
ましたので 御返事 延引 御免下され度 領収書同封  
致します 先はとりあへず 以上

六月二十六日 石井鶴三

改造社

御中

封筒表の宛先は、「市内 芝区愛宕下町四ノ六／改造社 御中」とある。裏は日付(六月二十六日)とともに、「市外板橋区中丸ノ二六六／石井鶴三」と鶴三本人の住所氏名が記されている。

同封された領収書には、次のように記されている。

領収証

一金 七拾五円也

但 吉良家の人々四十八人目挿画料

右正二領収候也

石井鶴三

昭和五年 「五 ミセケチ」 「六 右傍挿入」 月 二十五日

改造社御中

肉筆部分は、おそらく改造社の人間の手による「七拾五円也」「吉良家の人々四十八人目挿画料」、ならびに鶴三自身の署名と年月日の漢数字で、他の文字は印刷されている。

前項の書簡によれば、草平が改造社に赴いて単行本と謝礼を渡すよう頼んだのは五月八日であるから、謝礼が支払われたのは、それ以降ということになる。鶴三の書簡に書かれてある、鶴三の旅行先とその期間は、今回明らかにすることができなかった。

### 3 二資料の意義

この二資料の意義は、『吉良家の人々 四十八人目』という一冊の単行本を軸にして、作家と挿絵画家、および出版社との関係が把握できることにあるだろう。

草平の書簡と周辺資料による鶴三に対する言及は、単なる鶴三への称賛というだけでなく、読者が挿絵を小説本文と同等に、あるいはそれ以上に重要視していたことを示す。「吉良家の人々」の連載予

告や挿絵展覧会の広告は、そのような読者の傾向を新聞社側も認知しており、したがって挿絵画家の知名度や実績が、読者への宣伝として有効であると考えていたことの証左になろう。

また、作家個人の印税や挿絵画家個人の挿画料が判明したことは、大きな意義がある。今回は参照することができなかったが、同時期の他作家および挿絵画家の印税や挿画料を調査することで、当時の出版事情はもとより、作家や挿絵画家の評価を経済面から照射することが可能になるだろう。

### 注

(1) 『石井鶴三全集』第四卷(昭61・10・11)に収録されている「吉良家の人々」の挿絵では、筆者が確認した「東京朝日新聞」の資料と、日付は同じであったが〈三の五〉以降の回がずれていた。筆者が確認したのは国立国会図書館所蔵の「東京朝日新聞」マイクロフィルム版であったが、そこに〈三の五〉〈三の六〉の回は存在しなかった。

(2) この〈期待〉は草平の著作への期待というより、〈忠臣蔵〉ものへの期待といふべきだろう。改造社では、昭和四年八月に、大ベストセラーである大佛次郎『赤穂浪士』下巻を発売しており、〈忠臣蔵〉ものの売れ行きについては、ある程度の確信があったはずだからだ。〈忠臣蔵〉ものの愛読者であれば「四十八人目」というタイトルからすぐに〈忠臣蔵〉を連想するだろう。何より、『吉良家の人々 四十八人目』の単行本の宣伝文句は『赤穂浪士』の読者は是非本書を!!(『読売新聞』昭5・5・7)であった。

(3) 可能性が高いのは、山本實彦の実弟で改造社の「金庫番」であった、「支配人」の山本重彦である。(松原一枝『改造社と山本実彦』南方新社、平12・4・11)